
たとえば、歴史が。

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たとえば、歴史が。

【Nコード】

N0501Y

【作者名】

ハル

【あらすじ】

太平洋戦争末期、日本はアメリカに敗退を重ね、国は風前の灯火。いよいよ4月1日、沖縄上陸作戦「アイスバーク」が開始され、18万人の歩兵と1500隻の艦艇、2000機の航空機が進攻。そんな大軍に立ち向かうのは疲弊した守備隊と、徴兵された学徒兵、そしてある一人の存在でした。

昔話

遠い遠い、昔のお話。

一人の旅人が、ある村を訪れました。

その村はいつも不作や災害に悩んでいました。

旅人は未来を知っているといい、村人達に助言と予知を与えるのです。

その助言と予知は的中し、対策をした村人達は大助かりしました。

旅人はこれから起こる事を記した本を残し、村を去りました。

村人達は最初はその本を頼りに幸せな日々を過ごしていましたが、その本を一人の村人が奪いました。

更に独り占めをしようとする人がその本を奪い、そのうち、村で大きな戦いが起こりました。

小さな村は血と悲鳴にまみれたまま、滅んでしまいました。

残された本の最後のページには、こう書いてあります。

「やがて争いが起こり、村は滅んでしまうでしょう」

あの旅人は何者だったのか、本を何故託したのか、今となっては誰も知りません。

記念すべき第一歩

太平洋戦争末期。1945年4月1日、米軍は沖縄西海岸に上陸を開始。本来台湾を先に攻略し、日本本土に爆撃を行う予定であったが、日本軍は台湾に守備部隊を配置し、絶対の守りを固めていた。これにより沖縄の防備は薄くなり、結果的に本土への道を開いてしまふ。米軍は直ちに艦隊と上陸部隊を編成し、沖縄の飛行場を占領するべく、海兵隊の精鋭と最新鋭の艦隊を差し向けた。それがアメリカ力最後にして最大の作戦であった事は、誰にも知り得る事ではなかった。

沖縄の海は美しく、世界でも有数の観光名所でもある。戦争中である今では一人として観光に来るものは居ないが、10年ぶりに観光客が大量に来るらしいと、近隣の町は賑わっていた。沖縄守備隊の前衛である学徒兵の一員、前田もまた、小さな拳銃を握り締めていた。狭苦しい洞窟の中で、教育係兼隊長の志田少尉が声を張り上げる。

「連中は海を越えてやって来る。お前さんらが連中をやっつけなきゃ、今度は本土の皆がやられちまう」

志田少尉は沖縄でも数少ない実戦経験者で、地獄のシナ戦を生き残ったという強者だ。南方の領地を全て失った今では負け犬として扱われても仕方なかったが、玉砕直前に召還され、沖縄の学徒兵養成係に回されたのが幸いしていた。血気盛んな日本軍でも特に冷静らしく、心優しい男でもある。

「お前さんらを戦いに持ち出すのは不本意じゃが、連中はどうやら本気らしい」

少尉の話は他の上官と違って分かりやすく、故に否にも現実が伝わってきた。だから多くの少年少女が辛い訓練にも耐え、今まで付いてきたのだろうと前田は実感した。

「俺らは沖縄の飛行場を守らんといかん。味方の飛行機が飛べんなくなってしまうからの」

少尉は使い古しの汚い地図に、赤丸をいくつか描く。どれも訓練中に立ち寄った飛行場と基地の場所だった。沿岸に程近い飛行場に二重丸をつけると、彼等はそこが自分の死に場所であると理解する。

「ここに小さい塹壕地帯がある。ここに籠って、連中と遊んでやるのが仕事じゃ」

そこで一人の少年が、拳手をして質問した。

「^{米軍}観光客 は、いつ来るんでしょうか」

少尉はしばらく腕を組んで押し黙ってから、口を開いた。

「^{米軍}観光客の上陸は、明日だ」

海岸線が一望できる丘に彼女は居た。波の音に混じって聞こえる様々な音は、その内聞こえてくるだろう、飛行機・戦車・戦艦の爆音に飲み込まれてしまうのだと、彼女は知っている。丘の真下では子供達が一生懸命に塹壕を掘り、荷物を運んでいた。小1時間で彼等は猛攻に晒される。日本軍本隊がこの場所に到着するには少なすぎる時間だ。これから起こる事が手に取るように分かるのは、少々楽すぎると、彼女は目を細める。さあつ、と丘の上に海風が吹き、潮の匂いが辺りを満たす前に、彼女は消えていた。

沖縄の沖には、アメリカの誇る艦隊が展開している。戦艦は数隻しか見受けられなかったが、多くの駆逐艦が前衛を務めていた。揚陸

艦の数が足らなくなるくらい的人数が上陸に備え、大小計8隻の空母からは次々と爆撃機が飛び立つ。日本の航空戦力が無力である事を知っていたため、戦闘機は数える程度しか出撃しなかった。中には大和を撃沈したパイロットもあり、どれも歴戦の勇士が参加していた。対する日本はまともな戦力など残ってはいなかった。後の作戦のため迎撃機は上げられず、対空砲火のみで対処するしか道は無く、彼等に撤退の二文字は、無い。

事前爆撃を行う部隊は2つに分けられた。戦闘機中心の先行部隊は敵戦闘機や対空砲火等、爆撃の脅威を排除する露払いの部隊。主力部隊は対地装備を充実させ、塹壕や建物を破壊して上陸部隊進攻の足がかりとなる部隊である。主力の3キロ先を先行する、グレディ大尉率いる部隊は沿岸を目視した。あと5分もすれば爆弾の雨を降らす事ができるだろうと彼は思っていた。

（今日はこんな晴天なのに、雨が降る——か）

戦闘機F8Fの先行試作機の試運転がてら、彼は半分戦場の下見気分で飛んでいる。最早日本は反撃する力を失い、後はアメリカを前に屈服するのみだ。その幕開けを飾れる事は、彼にとって誇りともいえた。

自分の隣を飛ぶF6Fが機銃掃射のために高度を上げ始めた。対空砲火を通過するためには、少しでも高速で抜ける他無い。加速高度を取るべく、グレディも機首を上げようとした瞬間、前方をゆくF6Fが仰け反った。宙返りをするように回転する気体の機首に残っていたのは、粉々に砕けた風防。

（早い！対空砲火か！？）

グレディはすぐさま無線を開いて2機編隊で散開するよう命令を下すと、目の空を睨む。敵機が迎撃してきた可能性があるかもしれない。しかし、グレディは困惑する。自分達はおるか、沿岸に

すら、対空砲火の煙も敵機の姿も無かったからだ。

（馬鹿な、では何故あの機は…）

そんなことを考えている隙に隣の機もまた、右翼を根こそぎ飛ばされ、バランスを崩して高度を下げていく。更に後方で、高度を上げた機体がプロペラを吹き飛ばされ、グレディの真横を過ぎ、真つ逆さまに海面へ落ちた。

「大尉、味方が！」

「分かっている！全機、高度下げ！敵陣を抜けて反転攻撃をかける！」

どうせ航空戦力は皆無だ。例え出てきても、現存の戦力ならば充分に対応できる。500キロ以上の速度で海面を擦るのは危険な飛行だったが、謎の対空砲火を受け続けるよりは安全なはずだった。…はずだった。部隊は高度を可能な限り下げ始めたが、撃墜される機の数は一向に止まらない。墜落以外に水柱が立つ事も無く、攻撃を受けている様子など、どこにも見えなかった。

「クソ、クソ！全機、可能な限り回避しろ！」

返事の代わりに、目の前を通り過ぎた爆撃機が海面に激突して、水柱を上げる。気付けば、戦闘機は自分しか残っていなかった。

「大尉、ここはいったん退きましよう！予想以上の被害です！」

爆撃隊の生き残りが、自機の隣に付く。グレディを含め、残ったのは5割を切っていた。20機以上いた戦闘機は、自分しか残っていない。

「…後退しよう。全機、攻撃中止！帰還せよ！」

爆弾を満載した爆撃機はその装備を破棄し、直ちに機を振り向かせ…また1機、空中で四散する。爆弾の破棄をしていなかったのか、爆炎が機を包み、パイロットごと焼き尽くした。

「アンディ！？畜生め！」

爆発した機に友人が乗っていたのだろう、パイロットの一人が憤慨

した声を上げたが、数秒も経たない内に悲鳴に切り替わる。

「尾翼をやられた！舵が効かない、速度も上がらない……」

グレイの機のずっと前方で、徐々に高度を下げる機体があった。尾翼を喰われたらしく、機体が不規則に揺れている。

「大丈夫か？持ちこたえろ」

「ダメだ、墜落する！後で拾ってくれ……ん、雲か？いきなり影が……」
その無線を最後に、機体は火達磨となり、彼は二度と帰らぬ人となった。

先行隊の戦闘機23機、爆撃機55機の損害を聞き、航空攻撃は中止。司令部は戦艦と駆逐艦の艦砲射撃を行ったうえで改めて爆撃をするとした。これを受け、万が一のため戦闘機が出撃準備を始め、上陸部隊を乗せた駆逐艦隊も前進した。アイオワ級戦艦を中心に隊列を組み、塹壕を微塵に砕くべく、その砲門が沿岸に向けた時だった。隊列の端に位置していた駆逐艦が、突如爆発した。機関部から火の手をあげ、艦は直ちに傾斜していく。続いて一番砲が何かに押し潰されるようにひしゃげると、艦は左舷に大きく傾いて、その身を海に投げ出した。

「な、何があった！？」

「マッケンジーがなにかしらの攻撃を受けた模様！」

戦艦ニュージャージー艦長のオスカー少将は慌てて報告を促したが、返ってきたのは無情な被害報告であった。彼の視界の外で、上陸部隊を積んだ駆逐艦が瞬く間に沈んでいく。

「馬鹿な！敵機は居ない筈だろうが！」

彼は上層部の報告を丸呑みにし、艦隊を島に肉薄させていた。その報告では日本軍の本隊は島の奥深くに後退し、沿岸での迎撃は行われない、とされていたのだ。加えて、グレイ大尉の話でも迎撃機は認められていなかった。にも関わらず、今駆逐隊が被害を被って

いる。もしかしたら、沿岸に砲台が設置されているという可能性もあった。

「駆逐艦マツセイにも被害！」

報告が早いかな、続くマツセイは艦橋構造物を激しく撒き散らし、その動きを止めた。揚陸艦の壁役であったゼラスは周囲の揚陸艦に、もぎ取られた砲塔をぶつけ、辺りを重油の炎に染めて横転する。

「な、なんだあれは……」

オスカーは目の前の状況に驚く事しかできない。それは他の幕僚も同じく、僚艦がまるで爆破処分でもしているかのように容易く、原因不明の方法で沈んでいく。艦砲射撃の命令も出せず、彼等はただ異様な現実を目の当たりにしていた。

「う、うわっ！」

ほんの数秒の間に、駆逐艦4隻と無数の揚陸艦が海の底に消えていき、その矛先は戦艦ニュージャージーに向けてようとしている。艦のすぐ後ろで爆発が起こり、彼等は意識を引き戻された。

「か、回避！急速発進！面舵30！」

その命令を下した瞬間、艦橋のガラスが木端微塵に碎かれる。艦を揺さぶる衝撃にオスカーら要員は床に投げ出され、第2主砲が炎上する熱気がなだれ込んできた。

「何てこった！」

オスカーは咳き込みながら状況を把握するべく顔を上げる。そして見た。艦橋の縁に立つ、軍服を着た少女を。濃緑の平淡な、しかし然るべき迷彩力を持つ日本陸軍の一般的な服装であった。髪は鋼鉄の漆黒長髪で、肌は白雪の純白である。純然たる日本人でありそうで、そうでもないような、とても不可思議な印象を持つ少女だ。オスカーは場違いなその存在に、一言呟く。

「今日は厄日だ……」

この少女が、アメリカ艦隊を蹂躪しているかと思うと、到底気でも狂いそうな話だった。

「はろーです」

少女が軍帽のつばを少し持ち上げて、目元を晒し、口を開く。気の抜けた、まるでおどけた小娘のような声である。少女はとても温和に笑い、手袋をはめた両手をポケットに入れて計器盤に乗り上げた。「君は一体誰なんだ？」

オスカーは憔悴して尋ねると、少女はやや考えて、流暢な英語で答える。

「そうですねえ、言うなれば」

そこで言葉を切ると、少女は小柄な身体を翻し、炎を浴びながら再び艦橋の縁に立つ。

「神様…ですかあ？」

そう言い残して、少女は艦橋から飛び立った。オスカーは最早何も言う事はできない。炎と黒煙は勢いを増し、いよいよ艦は限界を向かえる。オスカー以外の要員も意識を取り戻して立ち上がろうとした時、弾薬庫に引火したニュージャージーは、10メートルに及ぶ火柱と水柱に包まれていった。

旗艦ミズーリ艦橋でスプルーアンスは驚愕した。先の爆撃隊に続き、前進した駆逐隊と戦艦ニュージャージーが全滅。オスカー少将とほか、上陸予定の海兵隊3個師団、およそ3万以上の将兵が海中に沈んだ。部隊の1割に当たる約3000名は救助に成功したが、残りは戦死。上陸部隊の1割強が、上陸前に失われてしまった。

「だからさっさと上陸しろと言ったろう、サイモンのクソツたれ！」スプルーアンスは報告書を床に叩き付け、士官に怒鳴りつけた。困惑する士官を置き去りにして、サイモン陸軍中将当てに無電を打たせる。

「サイモンに打て！とつと上陸作戦を開始しないと、ケツに主砲をぶち込むとな！」

通信要員は大声のあまり耳をキンキンといわされながら電文を打った。まさかそのまま伝えるわけにもいかず、ソフトな文章でだったが。一方電文を受け取ったサイモンは駆逐隊の二の舞になるのを恐れ、進攻を躊躇した。それでもスプルーアンスの強い後押しにより、艦砲射撃下での進攻が決定する。サイモンの指揮する揚陸艦隊が一斉に沿岸目指して進軍し、残った戦艦ミズーリが艦砲射撃を開始した。

「ありったけの航空機を繰り出せ！後方の味方にも出撃要請しろ！」スプルーアンスは沖縄上陸作戦、通称アイスバーグ作戦を中止することなく、その圧倒的な物量をもって再び攻勢に入る。

「サウスダコタ級は残っていたな？」

「はっ。マサチューセッツとインディアナが空母部隊の護衛に付いています」

「よし。呼び出して艦砲射撃に参加させろ。位置はこの南1キロ地点だ」

上陸部隊は既に沿岸地域に張り付き、間もなく沖縄上陸作戦が始まるうとしていた。もちろん、それが彼等に何を引き起こすか予想もしないままに。

空に舞い、海に躍る

志田少尉は塩臭い塹壕で、海上に浮かび上がる炎を見ていた。

（本隊は後退したはず…アマガエル隊？）

海上突貫部隊が攻撃したとすれば、それは文字通り自殺行為である。ただでさえ生還の見込みは無いのに、昼間にボートで艦隊に肉薄するなど、死に行くのではなく、死なされに行くということだ。

「志田さん！」

考えを途切れさせたのは、前田学徒兵の声だった。土まみれの服を迷彩代わりに、申し訳程度の鉄帽を被っている。

「アメリカ兵が上がって来ます！大層な数です！」

前田が指差す海岸では、揚陸艦が波を割って前進する姿が見えた。更に後方では駆逐艦が小型艇を降ろし、大挙して上陸を狙う様子が分かる。

「全員に通達！命令尊守・絶対服従！言う事聞かん奴は死んじまうぞ！ここを俺達だけで守り通す！良いな！」

前田は気合良く返事をして塹壕を走り抜けていった。直後、砲弾の飛来するひゅるひゅるという音が耳に付く。この音がもたらす破壊を、彼は知っている。塹壕は口を出切る限り狭くし、穴を斜めに掘ることによって着弾時の被害を最小限にする工夫をしていた。奥行きのある小部屋を中に設置して、兵をやり過ごす事も主眼に置き、塹壕というより地下通路とでも言うべき巨大な塹壕がこの場所に構成されている。これは南方作戦で防御作戦を経験した少尉が、学徒兵を良く訓練して計画的に動員した結果であつた。

「艦砲だ！入れ！」

志田の一喝に、子供達は素早く塹壕の部屋に飛び込む。鼓膜を揺さぶり、背後の家屋を吹き飛ばす様子が着弾音だけで把握できた。

「導火線用意！」

雑な出来の藍腕章をくくりつけた少女達が、塹壕の表面から垂れる

紐に手を掛けた。訓練拠点として使用した学校の理科室に、運良く取り残された化学薬品をかき集めて作った即席爆弾だ。正規の爆弾に比べれば子供だましの威力であったものの、銃もともに配備されていない学徒兵にとっては貴重な武器でもある。

「できたぞおっさん！」

上官に対し舐めた口を利く生意気な少女は、城崎だ。教官が志田でなかったら処罰モノの態度だったが、戦闘中に説教をくれるほど志田は阿呆でもない。

「ようし、それぞれが判断して点火しろ！できるな？」

「任せるよ！オキナワ魂なめんなって！特大めんそーれをプレゼントだ！」

お前は本州出身だろうが、との志田の言葉を聞き流し、城崎は導火線係の少女達に伝令に回っていく。態度こそ女子らしくもないものの、彼女は学徒兵のなかでも行動力のある奴だ。導火線を握る女子を優しく励まして、男子の背中に日に焼けた手で活を入れてやる。その様に安心し、志田は小銃を持ち直した。弾薬自体は本隊を離れる際に幾らか失敬し、銃さえあれば男子に行き渡る分がある。しかし銃なんて高級な武器はほなかった。しかも戦車なんて本隊ですら不足しており、米戦車に対して全くと言っていいほど無力だ。

「来たぞ！迎撃用意！」

200名程度の学徒兵がこの海岸線に配置され、米軍を迎撃するよう厳命されていた。沖縄守備隊司令部第32軍司令、牛島中将の命だった。もちろん勝てるはずもなく、また彼等は司令部が防御姿勢か反撃姿勢かで揉めている事など知る由も無い。志田もここで自分等が無駄死にするわけにはいかず、いずれ米軍を追い払う腹積もりだった。

（無理は承知。サイパンとガ島、硫黄島の悲劇は繰り返させん！）
九九式小銃を構え、志田は塹壕から身を乗り出した。揚陸艇の扉が開き、蜘蛛の子を散らす如く、海兵隊が飛び出てきた。が。勢い良く先頭に立った一人の兵が、砂を巻き上げて身を浜に埋めてし

まった。それに気付いた兵も立ち止まる前に穴に落ちる。学徒兵たちがこの砂浜一帯に落とし穴を仕掛けていることなど、誰が予想できただろうか。慌てて助けようとした兵が穴を覗き込んだ瞬間、白い砂浜に鮮血が散った。

「狙撃だ！」

前進しつつ叫んだ兵の口が永劫に開かなくなった時、戦車が揚陸に成功する。M4中戦車が無限軌道の頼もしい音を響かせ、歩兵の盾となつて前進するように思えた。塹壕に籠っている城崎は、片方が欠けた双眼鏡を覗きながら声を張り上げる。

「吉田、点火して！ 島袋はもう少し待て…今！」

少女達の手に収まる小さな導火線は植物油付けにされ、驚異的な速度で引火した。砂浜にまで導かれた火は小さなモグラ穴を通つて地下にある手製の爆弾を起爆する。本来なら戦車を破壊するなど夢のまた夢であつたが、志田は破壊されずとも戦車が無力となることを知っていた。砲塔に覆帯を巻いたM4中戦車は、日本軍の速射砲を危惧しているようだが、それは灯台下暗しである事を志田は身をもつて教える。米軍が誇る精鋭の海兵隊は戦車を盾に前進し、戦車は火炎放射器から火を涎のように垂らしていた。突如足元で起こった微弱な爆発に、海兵隊は身体を揺さぶられた。戦車が地雷にかつたのかと思つたが、なんの変化もなかつたので、そのまま前進を続ける。結果、戦車はもれなくその足をすくわれた。先の落とし穴に加え、大量の海水が砂浜の中から現れたのである。木の板を繋ぎ合わせて作られた木箱に海水と泥が貯槽され、それが穴の中に埋められていた。砂に海水が染み渡り、すぐに足場はぬかるんだ。泥にキヤタピラが滑り、志田の名付けた「蕎麦啜り作戦」は、見事に成功した。じゅるじゅると蕎麦をすする様に、戦車は足を止め、あつという間に立ち往生する。大きな穴は深さはそれほどではなく、1メートルもなかつたが、高速で突っ込んだ戦車は砂に滑り、たちまち車体を転がした。運悪く火炎放射器の燃料が漏れでてしまい、周囲にいた兵を巻き込んで、M4は大爆発を巻き起こす。落とし穴には

まった仲間の救助にあたっていた医療兵が、飛び散った燃料を浴び、全身が消えることの無い業火に焼かれた。その医療兵が力尽き、浜に転がる焚き木となった時、やっと前進に成功した兵が地に伏せた。それも束の間、彼の足元で、紐の切れる音がする。それが罨である事を理解した時点で、彼は背後に転がる医療兵と同じ末路を辿っていた。

司令部には上陸の様子が逐一報告され、遅々として進まない前線をスプルーアンスは叱責した。

「何故4000名も居るのに陸一つ上がれんのだ！」

サウスダコタ級戦艦2隻と、乗艦アイオワ級戦艦の砲撃音に負けないう声で彼は怒鳴る。すでに戦車8両喪失、兵の死傷者は100名を数えていた。周囲に展開する空母群からは、合計700機以上の戦爆連合編隊が敵陣地を目指して頭上を通過していく。

「出だしがこんな有り様じゃ、ハルゼーに笑われるぞ！」

参謀が必死に指示を繰り返していたが、上陸部隊は一人また一人と交信を絶っていった。そこへたたみ掛けるように悲惨な報告が舞い込んでくる。

「火力支援艦撃沈！上陸支援不可！」

ロケット弾による上陸部隊支援を行うはずであった、揚陸火力支援艦ハモンドが撃沈され、上陸は一層困難を極めた。部隊は砂浜に釘付けにされ、辺りは阿鼻叫喚の騒ぎであるという。戦車が進めば大穴が開き、歩兵が進めば火柱が上がる。そしてとうとう、被害の魔の手は艦隊にまで伸び始めた。戦艦インディアナは海岸線に対し5ノットで、平行に移動しつつ艦砲射撃を行っている。サイモンから橋頭堡確保の知らせが入るまで、相手の陣地を更地にしてやらねばならない。直に、その任務を果たす事は不可能になる。インディアナの誇る、40.6センチ主砲が轟音と共に必殺の一撃を繰り返す。

た途端、艦橋は原形も残されず上半分が砕かれた。まるで巨人に踏み潰されたかのように粉碎し、インディアナは煙を上げて停止する。インディアナ司令部は壊滅、とどめをさすべく、両翼をもがれた戦闘機がきりもみしながら第1砲塔に墜落した。味方の戦闘機へ充分に積まれた燃料と弾薬が甲板を舐め回し、海の上で、火の海が広がる。

「艦砲射撃が止んでいるぞ！何をやっている！？」

スプルーアンスは艦砲射撃が一発たりとも撃たれていないことに気付くが、マサチューセッツが艦首と艦尾を削られているのを見て絶句した。

「マサチューセッツ、退艦発令しました！」

マサチューセッツからは水兵が次々と脱出し、それらが重油の火に飲み込まれる姿も1キロ先から双眼鏡ではつきりと確認できる。ミズーリの至近距離に、味方の爆撃機が3機ほど、連続して墜落していった。

迎撃は大成功を収めた。艦砲射撃は続いていたが、迅速な対処と強固な陣地、敵上陸の遅滞が生徒達を奮い立たせる。志田にとっては、これすらも迎撃戦の序章に過ぎなかった。生徒達が徹夜で用意した武器はもとより数も少なく、手作りの落とし穴と対戦車地雷ぐらいだ。よって例え堅牢な陣地があったとしても、男子生徒が火の壁を起こしたら後退せねばならない。彼等は身を危険に晒して側面の林に潜伏し、米兵が一定のラインを超えたら、油をまいた防風林にむけて火をつけた。それは文字通り壁となって敵の進撃を防ぎ、自分達の退避する時間を稼いでくれる。

「ようし、塹壕から出る！第2ラインに再集合だ！行け行け！」

志田は弾を再装填しながら、生徒達に手を振り上げて合図した。少女達は城崎を先頭にして塹壕を飛び出すと、全速力で後退する。

「前田ア！やってきたか！？」

「はい！全部開け放ちました！」

前田は林から戻ってきた男子を塹壕の外へ送り出すと、自身も外によじ登った。志田も続き、弾の入った袋を下げなおして第2ライン目掛けて走る。海兵隊は火の壁を戦車で踏み越えたり消火したりして突破すると、残された陣地を制圧し、野戦司令部を置くことに決定した。それは、上陸部隊を更なる地獄に導く、巨大なブービートラップであった。

戦車17両、揚陸艦22隻、駆逐艦9隻、戦艦3隻、戦闘機90機、攻撃機48機、爆撃機185機、陸海空合わせて37000余人死傷の損害を出しながら、アメリカは沖縄に上陸した。艦載機は海上や上陸地点から立ち上る、沖縄の風に運ばれた黒煙に阻まれ、まともに支援を行う事はできなかった。落とされた対地爆弾は見当はずれな場所を爆撃して道路を破壊してしまい、むしろ車両部隊の進軍を遅らせることになってしまう。日本軍は海岸線から撤退したとして、サイモンは全ての部隊を上陸させ、物資補充の要請を出した。最初の目標を達成したアメリカ軍は次なる目標を中飛行場に定め、平原地帯を抜けるべく部隊を進撃させる。所々が断絶した道路が一本貫く、草の生い茂った平原だった。左右は沼と山林に囲われ、平原自体も腰丈の草が包んでいる。緩やかな速度で地面を踏み鳴らし、海兵隊師団は前進していた。

「帝国軍どもはどこにいったんだ？」

「俺達を恐れて、尻尾巻いて逃げ出しゃがったのさ」

先導するM4中戦車の傍ら、兵の一人が笑い飛ばすと、戦車はいきなりその大きな図体を前のめりにつんのめらせて沈黙した。もちろん兵は驚いて身を伏せ、大声で叫ぶ。

「落とし穴だ！猿め、こんな所にまで掘ってやがった！」

ところがもう一人の兵は憤って、小銃を構えて勢い良く走り出した。
「クソ！俺がルートを確保する！戦車を待機させる！」

周囲の仲間の制止を振り切って、草の上に顔を出したがために、彼は力無く仰向けに倒れこんだ。ここもまた狙われている事を知った米兵は急いで周囲に散開し、手ごろな岩場に転がり込む。それに安心して一息ついた兵が、頭を殴られたように傾げると、こめかみから流すおびただしい量の血と共に意識も失った。

「ディックもやられちゃった！狙撃に注意するんだ！」

部隊は匍匐で草の中を進み、時たま草の上に顔を出した兵がたちまち頭を撃ち抜かれる。茂る草のカーテンは視界と主導権を米兵から奪い、的確に飛んでくる弾は、彼等に日本軍の精鋭狙撃部隊が配置済みであると錯覚させた。ところが、既に日本軍には精鋭らしい精鋭はほぼ残っておらず、あるとすればせいぜい首里城に立てこもる空挺部隊や速射砲部隊くらいのものだった。戦車は落とし穴を恐れ、牛歩に等しい速度で戦車砲をでまかせに撃ち荒らし、歩兵は匍匐で必死に前進を続け、ひたすら攻勢を保とうとする。そして今、3両目の戦車が落とし穴にかかり、穴の中へ逆さまに転げ落ちた。致命的に、M1ガーランドの力キン、という特徴的な音があちこちで鳴り響き、米兵は自分の位置を相手に知らせてしまっていた。そのことに彼等が気付くのは、草の中を掻き分ける日本の小銃弾に貫かれてからであつた。

志田は射撃に関して特別、心得があつたわけではない。ただ手にしていたのが九九式小銃で、ただ撃つたら敵に当たったというだけの話だ。間抜けにも戦場で戦車砲と発砲音の合間に聞こえてくる、力キンという音に向けて撃つたび、こちらに飛んでくる弾の数が減っていった。1キロ近い距離を移動し、平原のど真ん中に掘らせておいた塹壕に彼等は居る。こちらは浜のとは違って至って簡素な掘っ

ただけの塹壕だ。だから爆撃なんぞされたら吹き飛ばし、乗り込まれたらおしまいだ。そのため、出来る限り敵を引き付けてから、飛行場まで一気に撤退しなければならなかった。飛行場には迎撃用意を整えた守備隊が、万全の態勢で待機している。学徒隊が撤退した暁には、海兵隊は磨耗した戦力で飛行場を攻略する羽目になるのだ。学徒隊の任務は玉砕ではなく、敵の進軍を遅らせて正規軍が態勢を整える時間を稼ぎ、敵兵力を少しでも減衰させることにあると、志田は考えた。子供騙しな作戦の数々は見事に敵の戦闘力をすり減らし、本来より1時間近く、作戦に遅れを生じさせる事に成功している。それが米海軍にとってどれだけ不幸だったか、また日本軍にとってどれだけ僥倖だったか、のちになって知ることになった。

米艦隊は後方の予備艦隊と合流し、空母22隻を中心に艦載機1000機以上を以って沖縄の海を蹂躪する。10隻の駆逐艦と20隻の防空艦が周囲を固め、神風隊が出現しても1機残らず撃ち落とせるだけの火力が艦隊にはあった。戦艦は先の上陸時に旗艦を除いて全て沈んだが、増援の戦艦をハルゼー中将が運んでくれる予定らしい。

「発艦用意が出来た機から順次発進せよ！マリーンが支援要請を送ってきている！」

「デイツク、座標を報告しろ。おい、どうした！」

空母群からは白鳥のように編隊が飛び立ち、沖縄本島に消えていく。その内何割が生き残れるのか、スプルーアンスには予想もつかなかった。

「B25が出るぞ！」

通信の最中にそんな声が聞こえ、スプルーアンスもその方角へ目を向ける。そこには確かに空母から巨体を揺らして発進しようとするB25ミツチエルの機影があった。鈍重な挙動で回頭し、甲板を狭

そうに後進する。カタパルトを装着してプロペラを力強く唸らせ、その機体が急速に前進を始める。ともすれば墜落しそうな速度で甲板を蹴らんとしていた刹那、機は甲板にめり込んだ。母艦の艦首をへし折ってミツチエルは爆発すると、格納庫を吹き飛ばす。搭載していた機体がたちまち鉄くずに変わり、艦は再起不能な勢いで炎上した。爆弾を満載していたB25の残骸がもう1回爆発し、甲板はめくれ上がり、消火作業を困難なものにする。そして作業が終わる前に、無事なはずの機関部も爆発して、空母エンタープライズは轟沈した。ドーリットル作戦を成功させた空母の同型艦として急遽上陸作戦に投入された艦であったが、

今ここにその艦命を終えてしまう。そして艦隊の中心にいたために、その様子は艦隊全てが見て取れた。

最初は発艦の失敗かと思われたが次の瞬間、隣の空母で同じ光景が繰り広げられる。空母2隻が一瞬でスクラップになり、スプルーアンスはそれが敵襲であると判断した。

「索敵しろ！レーダー確認！潜水艦の可能性もあるぞ！」

旗艦ミズーリから指令を与えられた各艦は、相対距離を取るべくそくさと舵を切る。最初に行動したのは駆逐艦ダルマシアだった。艦隊の先頭に位置するこの艦は、微速前進して対潜ソナーを起動する。故に犠牲になるのもこの艦である。機雷を装填した発射機を両舷から覗かせ、ダルマシアは恐れも知らず周りに目を凝らしたが、目ぼしい敵影は確認されなかった。もし人間一人においても軍艦にとって脅威であるとしていたら、あるいは生き残る事ができたかもしれない。

少女は主要空母2隻を沈めた後、上空を飛び回る直庵機を50機にわたって叩き落し、再び目下の艦隊に目標を定めた。島の遠浅な珊瑚礁を進む駆逐艦を一瞥して、彼女は空を切りつつ降下する。旋回

する戦闘機を一機巻き添えにして撃墜、駆逐艦の煙突へ飛び込むように着地した。ダルマシアは面白いぐらいに傾き、復原性を超えてバランスを崩した艦体は瞬く間に転覆してしまう。倒れる直前に誤射した単装砲が近くの味方艦に直撃した拳句、装填されていた機雷が零れ落ち、続く艦隊はそれを知らずに前進していった。空母1隻と駆逐艦1隻、巡洋艦2隻が派手に火柱を上げ、ダルマシアから脱出した少女は満足である。

虚空を突き抜けて、彼女は戦闘機の飛び交う空域を舞った。

「よろしければあ、私と踊りませんか？」

彼女が腕を振るえば艦橋がガラクタ置き場になり、足を投げ出せば主砲が鉄塊に変わる。彼女が子供のように飛び込めば、無事に受けとめることは不可能だ。ある巡洋艦が甲板を丸ごと破壊され、炎上している所に艦橋を根元から引き千切られてしまい、司令所が甲板上に転倒した。何とか這い出た人間は炎に焼かれ、悲鳴をあげながら海へ落ちていく。小型空母は舵を切り損なってしまう、撃沈されて間もない艦に激突し、艦首から浸水する。不運にも沈みかけの艦には大量の火薬が搭載されていたらしく、海中に没する直前、激突の衝撃と籠った空気に当てられて大爆発を巻き起こした。艦首を破壊した小型空母は浸水が増大、爆発の余波が装甲を圧迫、艦載機が揺れに耐えられず格納庫を暴れまわり、艦の全容が真っ赤に染まった。

「空母はとりあえず、全部退場ですねえ」

しばらくして、推進軸を真っ二つに折られてエレベーターを抜き取られたカサブランカ級空母1隻が岩場に座礁した以外、22隻の空母は全滅。僅かな小型艦が重油の海を右往左往しているのみである。「まあ、これぐらいですかあ」

めぼしい艦艇を沈め、概ね目的を達した彼女は、海兵隊の向かった飛行場へ視線を投げかけた。その先では、飛行場を占領せんと上陸した5000人の海兵隊が猛撃を仕掛けているだろう。少女は空中で軽やかに身を翻し、島の方角へ進路をとった。

途中、無傷な戦艦がいたので艦の中央線、艦橋を含む艦体全てを両断し、特に指揮所らしき部分を掴んで空高く放り投げる。まるで粉を払うように兵が散り、指揮所の残骸が戦闘機隊と衝突、火の粉と共に海面に降り注ぐ頃には、少女は飛行場へ向かっていた。

貴方は強くない

米戦車部隊は大きく迂回して罌を避け、歩兵は伏せたまま前進し続けた。日本軍からの攻撃は依然として止まず、へばり付いた地面に血溜まりができていたこともあった。それでも果敢に歩を進めた結果、荒れた岩場に囲われた飛行場を目視する。

「ニック、砲撃部隊に要請！邪魔なネストを吹き飛ばせ！」

指揮官の声に続いて、ニックは背負った機器から受話器を手に取り――直後、海兵隊のものでない銃声が二発、響いた。指揮官は素早く身を這わせ、ニックに近づく。

「おい、どうした！早く……」

うつ伏せたままのニックを彼が無理矢理ひっくり返すと、だらしなく口を開いた血みどろの、ニックだったものがそこにあった。指揮官は悪態について受話器をかつさらい、砲撃を請う。飛行場からこちらを睨む、いくつもの銃口に気付くこともなく。

志田は生徒達を一足早く後退させ、米軍の最後の足止めを行っていた。戦車は左右に散り散りとなり、歩兵は日本軍を恐れて積極的に攻撃に出られない。先程聞きかじりの英語で不穏な単語を拾ったため、草むらからはみ出た機器の足元を射撃した。効果はどれほどあったか知らないが、九九式小銃の力強い発砲音が彼に闘争心を絶えることなく与える。飛行所を振り返れば、既に日本軍の部隊が展開し、堅固な防御陣地から機関銃を覗かせていた。

（潮時か……）

志田は後退速度を速め、持ち場を放棄する。飛行場の塀を乗り越えた瞬間、背中越しに米戦車の悲鳴が志田の耳に届いた。

米軍の主な目的は沖縄に点在する飛行場の奪取である。標的にされたのは中西部に位置する中飛行場だった。東には嘉手納飛行場を擁

し、豊富な航空兵力を活用できる重要な拠点だ。もちろん日本には沖縄に配備するほど戦闘機は余ってはいない。しかし、それは航空兵力が皆無であるのとは話が違った。まともな戦力でない事を除けば、帝国は1500機以上の飛行機を保有し、新型兵器の開発が今なお進んでいる事を、米兵はおるか、日本兵さえ知らない。少なくとも彼等にとつて、今この場で戦う事が至上の使命。日の丸が懸かった建物の窓辺で、機関銃の引き金に手をかけた青年が汗を拭うことなく正面を見つめる。草むらの中、這い寄る敵の気配を身に浴びながら、彼は銃剣が手元にあることを確認して、指揮官の命を待った。心臓の鼓動が早鐘を打ち、体の中から破裂しそうな重苦しさが押し掛かる。やがて時間の判別がなくなつた頃、横に立つ指揮官の命令が、彼の手を動かした。

「撃てえええ！」

羅列する銃窓から、無数の火線が目の前の平原に向かって突き抜ける。耳をつんざく炸薬の音が脳を揺さぶり、屋外から戦車の砲撃音も聞こえた。少数配備された味方のチハ戦車であると思うと、背中を押されるような気分になる。こちらを狙う米兵を機関銃で穴だらけにしてやり、膝立ちの通信兵を機械ごと薙ぎ倒し、突進してくる火炎放射兵を火達磨にした所で弾が切れた。素早く弾倉を取り替えて彼は撃ち続け、岩場に隠れた敵を岩ごと削り、微かに見えたと鉄帽を貫くと、裏からわんさかと敵が溢れ出る。隣の兵士に援護を頼むと、彼は再び弾倉を取り替え、撃ち続けた。

少女はのろのろと前進する、まるで亀のように群れを成すM4中戦車の隊列に目をつけた。どの車両も無防備に横腹を晒しながら砲身を飛行場に向けている。彼女は落下傘部隊が降下せんとする勢いで肢体を反転させ、一直線に降下した。ハッチの中心に勢い良く着地すると、その戦車の装軌は地面に半分埋まってしまう。当然の如く砲身は捻じ曲がり、機関が聞いたこともないような唸り声を上げる。内部から人の声が聞こえたような気がしたが、エンジンが火を噴き

始めたので彼女はすぐさま次の車両に飛びかかった。着地のクツシヨンにされた戦車はつぶれたハッチを内側から叩かれながら、爆円に吞まれる。外の様子など知らない戦車は最後尾のものから食われていった。少女が飛びかかりざま左手を大きく振りかぶり、鋭く突き出すと、並の戦車には傷一つつけられない装甲が紙のように貫通し、燃料だけでない赤い何かも撒き散らした。M4シャーマンは痙攣のように車体を揺らして、動かなくなる。最後の一両がひっくり返され、車体後部を穴だらけにされた時、米兵の一人が少女に気付いた。正体など知るわけもなく、少女が戦車を素手で破壊したことに疑問を抱く前に、米兵はM1ガーランドを構える。白煙をくすぶらせる戦車の上で背を向ける少女に引き金を引こうとすると、振り向いた彼女と目が合った。途端、全身は言いも知れぬ感情に支配される。少女がこちらに一步踏み出したのと同じ、彼は全力で小銃のトリガーを引く。乾いた発砲音がいくつか、響いた。彼はこの平原に散った300人目の戦死者だった。

米艦載機部隊はわずかな生き残りが飛行場へ進路を取った。空母が壊滅し、帰る場所が無くなった今、敵の飛行場に降りる他ない。幸い、10機前後の爆撃機がロケット兵装を装備していたため、上陸部隊に有効な支援ができることなま違いなかった。生き残りの中で最も階級が上だったジェイク中尉が指揮を任され、彼の機が先頭に進み出た。戦闘機は良く生き残り、40機を数える。やや高度を取って追隨する彼等は、海軍の最精鋭パイロットであり、誰もが共同含め撃墜スコア3機を誇った。いちいち確認をとったわけではないが、少なくともこんな所で死ぬ連中じゃないとジェイクは考える。制空権だって自分達の手の中にある。だから、彼は何の気兼ねもなく飛行場へ進入し、対空砲火の洗礼を浴びる羽目になったのだ。それは日本軍にとって当たり前のことである。必然ともいえる。飛行場は大鷹だ。航空機という羽を持つ大鷹だ。だが、その羽がない。ところが、それは無力を意味するものだろうか。答えは否、だ。大

鷹は鋭いつめを隠し持っていた。のこのこと近づいてきた米軍を引き裂くだけの力を秘めた、強力な爪だ。対空砲火は、襲い掛かる脅威を易々と退けてみせた。

前田は開けた場所を避け、入り組んだ飛行場の中央を通り抜けて後方に下がろうとしている。岩ばった坂を駆け上がり、陣地の側面に差し掛かった時、轟音を引き連れて飛行機が地に突き立った。爆風と熱風に顔を庇い、再び陣地に目を向けると、ひどい光景が広がっていた。撃墜された米艦載機が死に土産とばかりに突っ込んだのだろう。数秒前までさかんに弾を吐き出していた機関砲はすっかり大人しくなってしまうている。その機関砲にすりつくように立ち上がる兵士を見つけた前田は、腰に下げた水筒と包帯を確かめて、兵士のもとに駆け寄った。その兵士は半死半生の状態だった。腹を鉄の棒が貫き、止め処なく流れる血が下半身を赤黒く変色させる。前田は言葉も出なかったが、急いで男を支え、手当てを行おうとした。ところが男は前田を認めるや否や、機関砲の射撃席に押し倒す。死にかけている人間の力ではなく、前田は突然の衝撃に喉がつぶれかけた。目を白黒させる彼に、男は席に寄りかかって前田に話し掛ける。

「いいか…坊主、無駄な事するんじゃない…」

血反吐を無理矢理飲み込み、今にも死にそうな声で男は続けた。

「この操縦桿で動かして…この輪っかに飛行機が入ったら…引き金を…引け！」

前田はこの兵士が自分にやらせようとしている事をやや遅れて把握する。撃たせようとしている、この機関砲を。自身の半分にも満たぬ齡の子供に、一人前の兵士が扱うべき「おもちゃ」を。

「引き金はここだ…強く引け。弾が出なくなったら逃げる…全力で、だ…」

男はそれだけ言い残すと席の反対側に回り、大きな弾倉を滑車から引きずり下ろして、機関砲の薬室に流し込んだ。くすぶっていた火

が再び盛り始めたように、機関砲はひと揺れする。

「やれ…任せたぞ…」

兵士は機関砲に身体を預け、そのまま滑り落ちた。それは二度と目覚める事のない眠りについた何よりの証拠だ。前田は男の遺志を汲む。逃げる事を忘れ、前田は機関砲の操縦桿を握り締め、引き金に手を掛け、空を見上げた。米軍の航空機がゴマ粒のように、やがて大鷲に見紛うほどの威圧を伴なって押し寄せる。前田は無心に引き金を引く。放たれた光跡は大きな爆弾を抱えた飛行機の中央を捉え、その機は一瞬で砕け散る。続けて前に進み出た戦闘機の首を叩き折り、応酬として他機の機銃がすぐ横の建物を穴だらけにしていく。それでも彼はひたすらに照星を敵機に合わせ、撃ち続けた。4機目の敵が襲い掛かり、機銃が機関砲の設置台を掠めて甲高い金属音を立てる。しかし敵の戦果はそれだけだ。代償に黄色のペイントが撒かれた機体を丸ごと40ミリの弾丸に貫かれ、名も知らぬ搭乗員が届かない悲鳴と共に100メートルの高度を落下していった。パラシュートなど役に立つはずがない。慰めに開いた落下傘は同じく撃墜された航空機の墜落に巻き込まれて引き千切られ、露出した岩場に消えていった。6機の敵を撃墜したのと同じく、引き金を引いても弾が出なくなる。前田は弾切れに気付くまで幾ばくかの時間を要した。興奮、焦燥、緊張、恐怖、どれとも分らない、あるいはその全てがない交ぜにされたような気分だった。自分の置かれた状況がようやく頭に入ってくると、彼は急いで席を飛び降り、前線と反対方向に走り出す。30メートルほど離れた時、さっきまで座っていた機関砲が爆弾の直撃を受けて四散した。あの近くで生き残っている兵士はいないだろう。前田は立ち止まって後ろを振り返り、少し戦線を見つめてから、再び走り出した。

「ひ…ひっ！化け物…！？」

暗い屋内で、大の男が情けない声と表情で後ずさった。これが米軍の誇る海兵隊の一兵士かと思うと、彼女は溜息がこぼれる。海兵隊

員はとつくに弾の尽きた拳銃を未だに握り締めて壁際まで退いた。往生際の悪い奴である。どこかで落としたサバイバルナイフ、飾りにもならないマガジンベルト、すすこけた迷彩服。哀れな敗残兵の末路であった。

「上陸部隊はあ、あと3万人必要でしたねえ」

日本陸軍の制服を着た少女は気の抜けた声で話しているが、男は震えるばかりで聞いていない様子だ。少女はもう一度溜息を吐くと、同じく気の抜けた声で男に話し掛ける。

「いふゆーあたつくとうおきなわあ、ゆーしゅどはぶもあーみいー……」

男はとうとう気が動転したのか、立ち上がりざま、少女に殴りかかった。本来なら彼の奇襲ともいえる行為に普通の兵士は吹き飛ばされていただろう。だが、相手が悪かった。少女は少しだけ目を細め、口元を緩ませて、口ずさんだ。ばつと、ゆーあーんとすとりんぐ……。

大きな小休止

米軍12万の兵が沖縄に消え、上陸部隊野戦司令部が敵地にて孤立した。上陸部隊のうち1個師団が集結して構築した塹壕地帯は、飛行場攻撃部隊が壊滅する間に拠点として改造され、敗走してきた攻撃部隊を回収する。昼過ぎには飛行場前に死体の山が積み上がり、日本軍は僅かな損害で米軍を撃退する事に成功した。本来なら戦車と航空機が飛行場の対空砲火と陣地を蹂躪するはずだったのだ。しかしふたを開けてみれば戦車部隊の泥沼な進軍と、航空機に至っては空母と共に海の底に消えた機体が殆どである。そして一番の損失は艦隊と司令の消滅であった。スプルーアンスは戦艦と空母を含む50隻以上の主力艦艇を沈め、自身も艦隊と運命を同じくした。もし彼が運良く生き残っていたとしても、査問にかかる必要もないくらい重罪であることに変わりはないが。もちろん、米軍高官達はこの作戦を絶対の自信をもって実行した。通商破壊や機雷封鎖は入念に行い、南部諸島は全て占領し、中国軍への工作もした。日本陸軍は中国大陆で苦戦し、勢力はもはや台湾までが限界だと踏んでの、最高に綿密な作戦だったはずなのだ。司令部は沖縄への上陸を断念し、アイスバーグ作戦を2ヶ月遅延する事に決定した。太平洋艦隊の戦力を再結集し、戦力を整えてからもう一度沖縄を攻撃するのだ。今度はイギリスから空母機動部隊が増援に駆けつけ、撃破された米空母の代替となる。かつてインド洋で日本軍に手酷い目に合わされたイギリス海軍は、息巻いてこのアイスバーグ作戦に参加を表明し、2年の歳月をかけて培われた戦力は失われた米海軍のそれを容易く埋めあわせて、来たるべき6月1日の決戦に備えてサイパンに駐留する。ここには戦艦インディアナポリスが運んでくる、ある秘密兵器が配備されていた。

沖縄の飛行場が守られた。本来なら米軍の手により一つ残らず破壊されるはずであった工場と研究所は傷一つ負わず、多数の技術官が生き延びて本州の工廠へ渡る。彼等が届けたのは、土壇場でしか思いつかないような、奇想天外とも言うべき研究成果と設計書だった。海軍には潜水戦艦、潜水戦闘機。陸軍には飛行船、防空艇。見たことも、聞いたことも、考えた事もない兵器の羅列である。これにはさすがの軍需企業も開発を渋った。今はB29を撃退するための新型戦闘機の開発に力を入れるべき時期であるし、それが実用に耐えうるのか、実績すらもないのに開発が成功するかなど、問題が山積みであったから仕方ない。ところが沖縄帰りの技術者達は、年初にドイツから密輸されていたミサイル・飛行艇のモデルと、アメリカの工作員が送ってきた飛行船・潜水戦闘機の実験記録を叩き付け、開発にこぎつけた。ドイツは既に大戦に敗北して降伏していたが、その直前にドイツ兵器の情報が沖縄に届けられていたのである。また、アメリカ人全てがアメリカの隷下だとは日本人は思っていない。祖国を追われた者など幾らでもおり、特にアジアとの麻薬取引を行っていたギャングなどは日本にとって最高の友であった。仕入先中国と売上先米国を同時に支配できるのは現状日本だけであり、この戦争に日本が勝利すれば酒屋と醸造家を一人で経営するが如く、自演的な商売ができる。そうすれば放っておくだけで金が溢れかえる裏社会経済が手に入る。愛国者はとても協力的であった。

新型兵器の開発は企業の予想を裏切り、概ね順調に進んでしまった。まず潜水戦艦だが、これは潜水空母である伊400型を改造することでコスト及び建造期間を大幅に削減した。最終増産態勢に入っていた伊400型のうち一隻を拝領して、格納庫を改装。航空機の代わりに、砲台を積み込んだ。もちろんそれだけでは足りない。もし浮上して砲台を展開し、砲撃を行ったら、艦体が問答無用でひっくり返ってしまう。これを防ぐために水中翼を装備した。これにより浮力と安定性を確保する事で、42センチ主砲が安心して砲撃でき

るようになった。サイズが大きくなって乗組員は不満を漏らしたが、回収した米潜水艦の最新ソナーと管制機構を積むとおとなしく黙ってくれた。

次に潜水戦闘機である。これは実はもう実験は外国で行われていた。あまり良い成果ではなかったが、その貴重な記録を元に試行錯誤を繰り返した結果、推進機構の問題に行き詰まった。プロペラで潜水艦は潜れず、スクリューで戦闘機は飛べない。このジレンマを解決したのが、プロペラとスクリューの中間のスパイラーの開発である。風と水の両方を効率よく掻き分け、なおかつサイズは小型、そしてこれを多数内蔵する。一つ一つは小さな推進力しか生まないが、小型ゆえに数で馬力を克服したのだ。まるで米戦闘機のムスタングを8発爆撃機にしたような外見だが、鋭角後退翼には機体と平行にスパイラーが内蔵され、空では時速480キロ、海では15ノットが期待できた。燃料のガソリンが両用のため、航続距離は1500キロと控えめだ。離着水は普通の飛行機の車輪のように、注水タンクを取り付けたフロートを展開して行う。車輪を装備できないため、水上機と同じ使用を想定している。

飛行船が一番の難関だった。なんせアメリカが一度計画に失敗しているのだ。そんな高度な計画が自分達にできるのか。…できるのである。水素ガスとヘリウムガスを混用した浮上機関と潜水戦闘機に使われたスパイラーを多数装備し、その巨体を遙か1500メートルまで持ち上げた。飛行船の命である風船部分は装甲を施された。といっても重厚な鉄板ではない。柔軟なゴム質を骨格に巻き付け、被弾時の損害を押さえる方向に持っていたのである。更に多重に区画を分けることで生存率の向上にも努めた。小口径ながらも砲身を長くする事で威力と射程を高めた機銃も各部に取り付けられ、戦闘機対策も取られた。最後、本体部分は定員200名の輸送型、定員100名の戦闘型に作り分けされる。輸送型は武装を施さず、ひたすら物資と人員の輸送能力に重点を置き、後方支援を目的とする。戦闘型は対空砲火と対地装備を施され、爆装量10トン、75センチ

千砲2門の空飛ぶ要塞に仕上がった。

防空艇は日本海軍でも以前から構想だけはあった兵器だ。大型の4発機に多数の対空兵装を積んだ、まさに飛ぶ火薬庫である。これが実用化すれば、爆撃機や攻撃機が戦闘機に一方的にやられるような事態が減り、万が一単体で戦闘機と空戦に入っても、一定の有効な戦果が得られると判断され偵察機にも推薦されていた。これには二式飛行艇がベースとなり、重装飛行艇として装甲と武装が進められた。

新型兵器のどれもが莫大な資材を必要としたが、特攻作戦に用いられるはずだった飛行機と爆弾をかき集め、貯蓄した資源全てを投じて壮大な開発計画は急速に集成する。また神風隊員の再育成を行って整備や本格的な空戦技術を教え込んで純粋な戦力化を図り、特に国内でも極秘に進められたのが特別作戦部隊の創設だった。これまでも特殊な意義を持つ部隊は数多く存在していたが、今回の特戦隊はこれまでのものとは一線を画する存在であった。恐らく戦況を一変させるほどの大きな意義をもった部隊である。これは国内から優秀な歩兵を選びすぎり、徹底的に個人の能力を高めて敵陣で孤立しても一人で生還できる程度」の力量を要した。敵国語である英語の習得、あらゆる武器の扱いの習熟、多岐に渡る戦術の練達。わずか30名の部隊は、地球上で最も強く、賢く、そして恐ろしい部隊として名を残す事になるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0501y/>

たとえば、歴史が。

2011年11月21日12時07分発行